

英文学にみる恋愛観 (1)

——ピューリタニズムとロマンティシズムのはざま——

近 藤 正 栄

ロマンスの伝統

1 ピューリタニズムとロマンティシズムの原点

人間は万物の霊長であるといいながらも、一人では生きられないきわめて孤独な存在である。同時にまた、これとの関連で人間は愛なしには生きられない存在である。

愛の形態がさまざまあるなかで、最大の関心事となるのは男女の愛、とりわけ恋愛であろう。恋愛に関してもその形態は多様であり、これを単純化して一定の枠内で性格づけることなどは考えられない。

ここで扱うのは恋愛観についてであるが、それは恋愛の形態の多様性を典型的に整理しようとするのでなく、形態的にみて恋愛とは地域性や時代性に影響される優れて歴史的な制約条件下にあるという認識のもとに、まずその制約条件とは何かを設定して、そこからその条件下で展開される恋愛観の歴史的な性格を検討するものである。

例えば、ルネサンス期の恋愛観と20世紀のそれとではおのずからその性格は相異なる。そうであれば、そうした相違を生み出す思想的背景を問うことなしには、先へは進めないはずである。本稿ではこれをロマンティシズムとピューリタニズムという両思想が生み出すものとしてとらえ、こ

の両思想の推移発展がどのように時代の恋愛観に反映されるのかを検討課題とする。

ロマンティズムとピューリタニズムとの組み合わせは、一方は個人主義、人間中心主義、他方は超個人主義、神中心主義であり、両者は一見して結びつかないように見えるのであるが、この二つは西洋文明の根幹にある思想であり、また西洋の文化現象を歴史的に制約する条件として欠かさない基本的な二大思想なのである。

文学の思想的傾向を大別して、一方は古典主義、他方はロマン主義とする見方があるが、この分け方は単純に伝統か反伝統かの見方によるものであって、必ずしも文学の思想傾向を適確にとらえるものとはならないのである。というのは、古典主義もロマン主義もそれぞれに伝統があり、ロマン主義だけがつねに伝統に反抗するものという形にはならないからである。また、伝統とは何かということで、もめごとさえおこる。

ロマンティズムとして定義されるものは⁽¹⁾、文学史などでは18世紀末から19世紀初期に発生した思想傾向を表現したもの、ピューリタニズムはそれより以前のルネサンス期に見られたものとしてそれぞれ位置づけられる。しかし、この両思想は発生的には古いものであって、近代において初めて登場した思想ではないのである。これをさかのぼれば、文明の発生起源というところにまで立ちいたらなければならないが、ここでは西洋文明の本体を支える基本的な二大思想としてとらえておきたいのである。したがって、この両思想は一時期のかぎられた思想として解釈されるべきものではないのはいうまでもない。

この二つの思想はそれぞれ別個なものとして扱うことができるが、もともと両思想は相互に関連し合うものとして発生したのであって、これを個別なものとして切り離してとらえてみても、その全体像はつかみ切れないのである。両者の関係は、人間についてならば、精神と肉体との関係あるいは男と女の関係であって、この両者の相補関係にこそそれぞれの個別の相や人間としての全体像が浮び上ってくるというのと似ている。

このように相異なる二つのものの相補関係は、存在するものすべてを制約するいわば絶対条件というべきものである。われわれ人間は、生きるための生存条件として文明という枠組に制約される。これも絶対条件である。人は文明によって保護される代わりに、その制約の絶対条件を受け入れなければならない。これは人間にとって最大の苦悩である。われわれはこうした文明の枠組の中に、ピューリタニズムの思想とロマンティズムの思想を見るのである。一方は文明の枠組を受け入れる思想であり、他方はそれに反発する思想である。しかしどのようにもがいてみても、文明という枠組からは人間はのがれられないようにできている。したがって、文化現象といわれるものも人間が生み出すものであれば、すべてそれらが帰属する文明の枠組によって制約されたものにならざるをえなくなる。

そうであれば、まず問われるのが文明の枠組の性格である。歴史的には文明の宗教の性格がその枠組の性格づけに影響を与えてきた。そこで、あらかじめとらえておかなければならないのは、西洋文明の宗教であるキリスト教の性格であろう。

宗教の性格は大別すると二つのものに分けられ、一つは男性宗教、もう一つは女性宗教である。キリスト教はユダヤ教を母体とするもので、思想的にはヘブライズムといわれる男性宗教である。女性宗教の形態は古代の原始的な宗教の形態に見られるもので、思想的には男女平等を説くが、男性宗教は男性優位の性差別を原理とするものである。歴史的にはヘブライズムの思想は、一神教の男性神を奉ずるヘブル民族がその定住先で女性宗教と戦い、勝利して以来保持されてきたものである。ヘブライズムの思想から結果したものとして見られる特色は、今日においてもなお健在の父権制社会の確立であった。

ユダヤ・キリスト教の流れの中にあるヘブライズムの思想は、一民族の宗教思想としてとどまるものではなかった。文明という巨大な枠組の中にこれが取りこまれて、文明そのものを性格づけるものとなった。ここにわれわれはヘブライズムのはかり知れない影響力を見るのである。

6 言語と文化論集 No.1

西洋文明はキリスト教がローマ帝国の国教として位置づけられた時点をもって始まるといってよいが、これによって助長されることになったのは、男性宗教特有の思想性の強化であった。キリスト教を取りこむ以前のローマ帝国の宗教は、性格的にキリスト教と同様の男性宗教であり、ローマ帝国にとっては宗教の性格上の違和感はなかったはずである。というより、政教一致の世界で、しかも宗教の国教化が施行されれば、その差別主義の排他的性格の徹底と強化には、キリスト教は大いに役立ったとさえいえる。宗教の国教化は、今日においても見られるように（現在国教を定めている国は約100か国）、少数の例外をのぞいては宗教の共存を拒否する。ために国教以外の宗教は宗教差別によって迫害や弾圧の対象になった。しかもその延長線上に見られたのが、性差別や人種差別の拡大強化であった。

西洋文明の進展に伴い、キリスト教がヨーロッパ全域に侵透すると、それまでヨーロッパでは固有の伝統宗教であったケルト民族やゲルマン民族などの女性宗教はキリスト教の男性宗教にとって代わらざるをえなくなった。

このように一元化された宗教への改宗状況の中にわれわれはピューリタニズムの原点を見るのである。これは自然発生的なものではなく、人為的、革命的なものである。これに対してロマンティシズムの思想はこうした革命以前の状況に戻ろうとする思想として定義できる。ピューリタニズムもロマンティシズムも視点を変えればともに革命的要素をもつのであるが、その性格はおのずから相異なる。ピューリタニズムは人為的統一づくりを目ざし、ロマンティシズムはそこからの解放を目ざす。西洋文明圏では、前者は伝統固守を、後者は反伝統をそれぞれ主張することになる。

男性宗教が支配的な世界では、父権制社会の特徴としてとくに目立つのが性差別である。性差別は西洋文明のうごかしがたい伝統であり、ここからの解放を目ざすどのようなロマンティシズムも、ピューリタニズムの伝統の圧力をはねかえすだけの力とはなりえなかったというのが歴史的現実であった。しかし、ピューリタニズムとロマンティシズムとは相互に影響

し合いながら推移せざるをえなかったという歴史は跡づけることができる。

西洋文明の宗教として取りこまれたキリスト教は、中世ではカトリックとして性格づけられ、女は男に従属するものという性差別の中で禁欲主義が説かれた。これはキリスト教初期の教父たちの思想にも見られるものである。むろん聖書自体に説かれる禁欲主義が男女の性差別に基づいているというのではない。キリスト教がヘブライズムの流れにあるかぎり、またその父権制社会という枠組の中では性差別は当然の帰結なのである。

カトリックの教義では、男女のむすびつきである結婚は秘蹟（サクラメント）であり、子孫をのこすために聖別されたものと考えられた。結婚が聖別された秘蹟であれば、恋愛と結婚とはむすびつかないし、夫婦間の恋愛さえも禁じられる。とりわけ自由恋愛はご法度となる。本物の恋愛は自由恋愛であり、それが成立するのは男女平等が条件である。自由恋愛が認められない性差別の状況下では、恋愛という形態のものがあっても、それはみせかけのもの、いびつなものである。

ヘブライズムの思想では男女の平等はありえないといっても、女性性は男性に隷属するものという父権制社会の固定した観念では、不平等と思える男女の関係も不平等ではなく、そのかぎりでは性差別はないということになる。しかしこのようなピューリタニズムの世界観の中でも恋愛が成立するとすれば、それは反伝統のロマンティズムのもち主だけにかぎられるアウトロー的な性格のものにならざるをえない。そうでなければ、ピューリタニズムの思想の枠組はそのままにして、中味をロマンティズムのものに入れ替えた恋愛の形態が考えられる。つまり性差別を是とする中での一方的な男性優位の恋愛である。いずれにしても、恋愛に関するかぎり、ロマンティズムのかかわりのない恋愛は考えられないのである。

2 伝統と反伝統

結婚は人間にとって重大事であり、最大の関心事である。何であれ、二

つのものが一つにむすびつくためには一定の法則がある。法則とは抑圧であり、自由を拒否する制約である。夫婦としての男女のむすびつきが結婚であるとすれば、そのむすびつきを制約する条件があって当然である。

われわれが文明という制約された枠組に帰属するかぎり、だれであってもそこからは脱けられない。いいかえれば、文明の支配とは絶対のものであり、それを拒否しては人は生きられないのである。したがって、結婚もその支配を甘んじて受けなければならない。これは自由を求めようとする人にとっては不満である。しかし、この不満を解消するすべはないのである。

文明の支配は固定されたもの、伝統であり、これに対する不満の挑戦は空しいのである。そうであれば、不満を不満とせず、むしろそれと上手につき合えばよいというのが、人間のとるべき一般的な受けとめかたとなる。ところが人間は、それほど聖人君主的な態度で生きられるほど単純な存在に生まれついていない。たえず不満の原因の根源といえる伝統と衝突し、そして衝突しては挫折するというくり返しが起こる。この衝突は伝統と反伝統の衝突であり、思想的にはピューリタニズムとロマンティシズムの衝突として、西洋文明圏では今日まで依然としてつづいているものである。

西洋文明に枠づけされた父権制社会では、性差別は伝統であり、これに挑戦するのが反伝統である。伝統は権力であり、反伝統は反権力である。ここから生じるのが支配・被支配の論理、力の論理である。ユダヤ・キリスト教の基本思想、ヘブライズムは性差別を前提とする力の論理である。この伝統を引きついだのが西洋文明の中に息づく父権制社会の伝統である。

ピューリタニズムの思想はあくまでもこの伝統に固執し、性差別を当然の原理とし、これに反発するロマンティシズムの思想を敵と見るのである。ロマンティシズムの思想が抑圧されているところでは、例えば中世の社会では、男女の愛の関係は宗教的にきびしく制約されたものとならざるをえなかった。

結婚がキリスト教の教義上秘蹟とされるのは、ロマンティズムの介在による結婚と恋愛のむすびつきをおそれたからである。したがって、何よりも性差別の伝統にしたがい、恋愛そのものを認めないほうがよかったのである。男女の恋愛を公然と認めたのでは、父権制社会の根幹がゆらぐことになる。また、伝統への挑戦にも手を借すことになる。伝統の側に立てば、恋愛はご法度としてきびしく禁圧されなければならない。伝統とはどういうものであれ、いったん形成された伝統は死守されるべきものなのである。

しかしまた、伝統とは反伝統によってたえずおびやかされるものでもある。伝統と反伝統は永遠の宿敵関係にあるといえる。中世末期に伝統への挑戦として反伝統の宗教的異端運動が起こった。異端は正統に対立する概念である。しかし、正統か異端かは、伝統か反伝統かであって、不変的内容をもつものではなく、相対的、可変的なものである。伝統はあくまでも正統であり、それに対立する反伝統は異端として甘んじなければならない。

同じ文明圏では宗教の伝統は絶対的なものであり、その伝統に反発する宗教上の異端はことごとく弾圧の対象になる。しかもその弾圧は徹底して行なわれる。中世末期の異端運動が失敗に終わったのはそのためである。しかし同じ反伝統の思想であっても、宗教上の対立にはロマンティズムの思想は関与しないのである。ロマンティズムの思想はあくまでも世俗的な領域の反伝統の思想としかむすびつかない思想なのである。したがって、宗教上の異端運動はロマンティズムの運動としてはとらえられないのである。

ロマンティズムの思想は、善と悪、白と黒というようなたがいに否定し合う対立概念とは無関係に反伝統の性格だけをもつものであり、宗教上正統とか異端とかいわれるものにはくみしない、優れて非宗教的、反宗教的思想である。もちろんこの思想は、性格的に伝統とむすびつく正統の概念に対する異端の概念というほかないが、その用語の扱いにおいては宗教上の用語とは区別しておかなければならない。

改革とか革命ということでも、伝統か反伝統かに分けられる。例えば、宗教改革とかピューリタン革命といわれるものがそれである。改革も革命も伝統への挑戦であり、反伝統であることには変わりがないが、それらが直接宗教にかかわるのであれば、そこにはロマンティシズムの思想が介在する余地はないのである。しかし、直接宗教とはかかわりをもたない市民革命とか政治改革という形のところでは、ロマンティシズムの発露が見られるのである。けっきょく、ロマンティシズムの思想は人間中心主義の思想であり、宗教のかかわるところでは出番がないのである。

中世末期に出現する運動形態に宗教改革とルネサンスがある。しかし、両運動はともに文明の枠組内にとどまっていた運動であって、文明という枠組の伝統に挑戦する反伝統という性格を帯びたものではなかった。宗教改革はあくまでも宗教の威信回復を目ざすものであり、そのかぎりにおいてはピューリタニズムの精神から逸脱するものではない。しかし文明の枠組内にとどまるとはいえ、宗教改革は反伝統の運動であることには変わりがない。したがって、ここには多分に反伝統のロマンティシズムの精神がはたらくことになる。

ただ、ここで思想内容として区別しておかなければならないのは、ロマン主義とロマン主義的精神との相違である。ロマン主義とは本質的に文明の枠組とは対立する反伝統の思想である。これに反してロマン主義的精神は文明の枠組内で発揮される反伝統の精神なのである。

ロマン主義とロマン主義的精神の関係を例えていえば、一方は毒物であり、他方は毒物であっても薬用としての効果を発揮するものである。両者は本質的に毒物であることには変わりがないが、それが少量であったり、使い方によっては薬用としてのききめがあるということである。ロマン主義はそれが反伝統の毒物であるかぎり、どのような伝統ともむすびつけないが、ロマン主義的精神は、改革であれ革命であれ、宗教的なものであれ政治的なものであれ、それが伝統と対立するものであれば、そこには必然的にロマン主義的精神の発現が見られるのである。

16世紀の宗教改革運動に見られるもののの中にミュンツァー型といわれるものがある。宗教改革の運動は一般にルターやカルヴィンの名で知られているものであるが、ミュンツァー型のもは教会の裏面史にしか登場してこない政治色の濃いラディカルな宗教改革の運動である。これは宗教改革というよりは宗教革命というべきものである。この運動は長つづきせず、途中で挫折したのであるが、その原因は、トマス・ミュンツァーの思想が文明の根幹をゆるがすロマン主義の思想であったからである⁽²⁾。宗教の改革には反伝統のロマン主義の思想はもち込めないのである。ミュンツァーの運動は宗教の名を借りた政治運動であり、しかもラディカルなものであった。ために、外的圧力の中で自滅するほかなかった。父権制社会の世界にあって、その伝統をくつがえす思想や運動は、文明の終焉期においてでなければ、その出口を見いだしえないのである。ミュンツァー型のものとは異なるルターらの正統派宗教改革が一定の成功を治めたのは、制約された反伝統という枠組を超えることがなかったからである。

宗教改革期と時期を同じくするルネサンスの興隆は、ロマン主義の思想によってではなく、ロマン主義的精神に基づくものである。ルネサンスとは、一般に文芸復興と解釈されるのであるが、その基本的な精神は人間なら人間の、宗教なら宗教としての本来あるべき姿に立ち帰るという、返り咲きの精神なのである。したがって、宗教改革もルネサンスとは性格を一つにするものといわなければならない。

もともと同根のものが、一方はルネサンス、もう一方は宗教改革として分けられるのは、文明の枠組の権威に劇的な変化が生じてきたからである。中世では、世界も一つ、宗教も一つ、学問も一つというように、すべてはたった一つの権威によって支配されていた。文明の枠組の中心には、本来的に分けるべき二つの権威、聖と俗の両権威があるが、この二つの権威が何百年にもわたって一つの権威のものとして秩序づけられていたことに原因があった。これが中世末期になって二つのものに分断されたために、これまでの伝統を打ち破るという形で、にわかに返り咲きの精神が芽ばえて

きたのである。宗教改革は宗教の領域で、ルネサンスは世俗の領域でいうように、それぞれが独自の返り咲きの運動を起こしたのはそのためであった。もちろん、両者の運動は文明の枠組内にとどまるかぎり、基本的には対立するものではなかった。

宗教改革とルネサンスは同時期に進行するが、ルネサンスは伝統的な宗教の権威に挑戦するという形のものとはならず、宗教の権威は聖界の権威として認め、それとは一定の距離をおく形で、俗界の権威を浮き上らせるというものであった。しかしながら、ルネサンスの登場は、少くともその初期のころは、人びとに不安と焦燥の思いを与えずにはおかなかった。新しいものの誕生には、それを受け入れる心の準備が欠かせない。準備ができていても、なおそこには、不安と期待が入りまじってのこる。それはこれまでとはちがった形の一つの魂と意志とをもったものが誕生するからである。新しい形のものとは知識欲である。その知識欲を満たすためには、僧院ではなく、大学が要求される。詩人であれ、哲学者であれ、思想家であれ、科学者であれ、これまで平等の扱いを受けなかった者が平等の権利を要求して出現する。そうした時代環境の中で、ルネサンスの先覚者といわれたのが人文主義者たちであった。

人文主義者の代表格として、エラスムスとトマス・モアが上げられるが、彼らの知識欲の発現と時代環境とのかかわりを見れば、ルネサンスの性格と方向がとらえられるものと思われる。

人文主義者は、その学問研究においては伝統とは直接かかわらずにすんだものの、文明の枠組からは解放されていないということで、教会の伝統には従わざるをえなかった。その上厄介なことは、宗教改革の反伝統の運動とのかかわりであった。けっきょく、エラスムスの場合、彼は教会側にも宗教改革派の側にもつかぬ立場をとった。つまり、彼は宗教上の伝統にも反伝統にもくみしなかったのである。彼の宗教に対する知識欲は信仰の内面だけのものにかぎられた。

エラスムスは徹底した平等主義、平和主義、協調主義、教養人主義、個

人主義を貫き通した。これこそルネサンスの返り咲きの精神を代弁するものであったといえる。しかし、これが通用するほど時代環境はおだやかなものではなかった。初めは彼の超然たる態度を賞賛して、カトリックの側は彼の教えに頭を下げたものの、のちには彼のあいまいな態度が非難され、彼の存在さえも無視された。プロテスタントの側からも彼は同様の扱いを受けたばかりでなく、嘲笑さえされた。

エラスムスはひとりさびしく孤独の生涯を閉じたが、このことは同様にモアについてもいえる。モアは人間の自由と平等を説き、伝統にも反伝統にもくみしない立場をとった。しかし皮肉なことに、彼は当時最高の世俗の権力者ヘンリー八世につかえ、しかも世俗の人事としては初めての大法官にも任ぜられた。しかし、ヘンリー八世の離婚問題が生じてくると、モアの運命は一変した。彼は伝統か反伝統かの二者択一を迫られ、離婚をご法度とする伝統を選択した彼は大逆罪の汚名を受けて死刑となった。

伝統といい反伝統といい、それが文明という根幹の中でかかわる権力との関係概念であれば、とくに権力構造が複雑化するルネサンス期以降においては、その影響下にある文化現象も複雑化することが予想される。

3 中世風ロマンス

伝統という概念は、西欧ではルネサンス期に入って、反伝統の傾向がつのまる中で浮び出てきたものである。文明の枠組が強化されているときには、伝統という概念は生じてこないのであって、それが浮び出てくるのは、文明の枠組がゆるんできたことに原因がある。

文明の枠組を支える二つのエネルギー源となる思想は、ピューリタニズムとロマンティシズムであるが、この二つの思想のバランスが崩れたときに、文明の枠組にゆるみが生じてくるのである。ピューリタニズムとロマンティシズムの関係は、これを例えていえば、うず巻きを支える求心力と遠心力の関係に似ている。一方は内側へ、他方は外側へと向ける力である。

つまり、ピューリタニズムは伝統固守の求心力的な力、ロマンティシズムはそこからの解放を求める遠心力的な反伝統の力と考えてよいのである。

伝統も反伝統も抽象的な概念として存在するのでなく、なんらかの実体とむすびついて初めて表面化するのである。伝統は慣習といいかえてよいが、その概念は過去からつづいているというような単なる慣習ではなく、同じ慣習であっても、価値概念が固定化されていて明確なものである。西洋文明の枠組を価値づけている中心思想がヘブライズムであれば、そのヘブライズムに基づく慣習が伝統として価値づけられたのである。いいかえれば、ピューリタニズムの価値である。そしてこれに対立するのが反伝統のロマンティシズムの価値である。

中世では伝統とか反伝統とかいう概念はなかった。伝統がすべてであったからである。しかしそれでは、中世の世界には伝統に対する反伝統の入り込む余地はなかったのかというと、そうではなく、かえってその受け入れを容易にさえしたのである。むしろ、伝統を根底からおびやかすというような反伝統であれば、論外である。中世で反伝統を受け入れる空間は宮廷であった。中世の宮廷はロマンティシズムの思想が発現できる唯一の場であった。

ロマン主義が反伝統として立つ精神は、ユダヤ・キリスト教の伝統に根ざす差別主義からの解放である。とりわけ男女の性差別はがまんならないところである。中世のキリスト教がカトリックであり、禁欲主義を伝統とするかぎり、そこに生じる反女性、反肉体の思想の影響をうけて、男女の愛の形態はきわめていびつなものとならざるをえなかった。

今日では、性差別の原因として女性の肉体が汚れたものだとする見方はないが、中世ではこの見方が依然としてのごとく、それがために女性は蔑視され、脅威や恐怖の対象にさえなった。こうした時代環境からは、恋愛というような男女の愛の形態が育つはずもなかったし、結婚も秘蹟として慣習化されていたために、夫婦といっても、妻は夫が所有する財産の一部としか見られなかった。概念的に結婚とは男女の相互愛の発露などと

は無縁の利害関係による男女のむすびつきであり、これが政治的に利用されれば、政略結婚という形になるのが一般的な傾向であった。

伝統があれば、反伝統はつきものである。その反伝統が半ば公然と認められたのが、宮廷という特権階級の世界であった。つまり、反伝統のロマン主義の発露が見られたのは、宮廷というかぎられた世界だけであった。しかし、宮廷といえども、文明の枠組という制約からはのがれられないとすれば、その反伝統も、伝統の中の反伝統という形のものでしかなく、その性格もきわめてかぎられたものになるのはいうまでもない。

反伝統としてとくに関心の的になるのが、男女の情熱が相互に花開く恋愛、ロマンスである。中世において、ロマンスの物語が突出してくるのは、中世も後期、封建社会の騎士道華かなりし12世紀ころであった。当時、王侯、貴族は封建的体制を強固なものとするために騎士団をかかえていて、騎士に対しては封建道徳に基づく騎士道精神を確立する必要があった。とりわけ騎士団の懐柔策は欠かせない。荒武者たちを懐柔するには、家父長制のヒエラルキーに従っているだけでは不十分である。家臣としての服従の強化につながる何らかの情熱の称揚手段が必要であった。

こうした情熱の称揚には、ロマン主義の精神の発動をうながすのがもっとも効果的である。ここで初めてロマン主義への道をうながすことになったのが、本来ならばご法度の恋愛の解禁であった。しかしここには制約があり、恋愛は若い未婚の騎士と既婚の貴婦人との恋愛にかぎられた。騎士は一人の既婚の貴婦人に精神的な形の情熱的な愛を捧げる。相手もまた騎士にその愛を返す。騎士にとってはこれは出世への道にもつながることから、騎士がその愛に報いるにふさわしい武勲を立て、礼節をわきまえて自己研鑽にはげむことは主君に忠誠をつくすことの証しであり、喜びでさえあった。

貴婦人たちが夫には肉体的な愛を、愛人には精神的な愛を与えるというのは、婦人が夫と愛人を同時にもつことの公認であり、一夫一婦制の慣習での不倫の黙認というのともちがい、じつに奇妙である。しかし、男女の

愛の情熱というのはもともと奇妙なものであり、ミステリーの一つであって、恋愛の情熱からこのミステリー性をのぞいたら恋愛などは存在しないといってよい。

恋愛の情熱には空想力がつきものである。空想力は、ロマン主義の領域に属することから、あらゆる障害や制約を乗り越えようとするときに発揮され、その行きつく先も理性の力ではとらえられないところである。これが恋愛の情熱に伴うミステリー性である。ミステリーな世界は通常感覚とか思考の領域を越えた世界であり、超理性的な体験を重んずるところである。そうであれば、ミステリーな世界に属する恋愛がさまざまな様式や形態を帯びたものとなり、しかもその現われ方が時代によって、特色のあるものとなるのは当然である。中世の騎士社会の中でくり広げられた恋愛は、それが宮廷という特殊な舞台を背景にしたものであれば、宮廷恋愛といわれるものとなり、そしてその延長線上にある同類のものは総称して中世風恋愛、ロマンスと称してよいのである。

宮廷恋愛がさかんなころに、トルバドゥールという吟遊詩人が現われて、城から城へ、町から町へと堅琴をかなでて勇ましい騎士の情熱や武勲の物語などをうたって歩いた。しかしやがて、トルバドゥール自身も騎士同様に貴婦人を恋し、その恋愛にまつわる情熱的な詩をうたうようになった。

宮廷恋愛に発する中世風ロマンスは、情熱恋愛の原型として今日伝えられているものであるが、おそらくトルバドゥールの出現がなければ、この原型は埋もれたままであったと思われる。

中世風ロマンスを象徴する物語にケルト人の伝説『トリスタンとイゾルデ』がある。ここには情熱恋愛の原型、中世風ロマンスまたは宮廷風恋愛の特色の全容が見られる。この物語のあら筋はこうである。

コーンウォール王マルクの甥、孤児トリスタンは宮廷に引き取られて養育された。例年のように貢ぎ物の請求にきたアイルランド王の使者モロールの挑戦に応じたトリスタンは、勇敢に戦い彼を倒すが、自らも傷を負い、

その剣にぬられた毒に犯された。

トリスタンはその傷のいやしを求めて船旅をする。やがてたどり着いて見れば、そこはアイルランド。しかもこの国の王女イゾルデ、モロールの姪だけが彼の傷を治す法を心得ていた。幸いにもトリスタンは何もさとられずに治療を受けて帰ることができた。

トリスタンは、ツバメが落とした金髪の主を己の妃にせんとしていたマルク王の命を受けて旅立った。その主はイゾルデだった。いろいろ危険をおかしたが、彼は彼女を説得して帰途につく。その船上でイゾルデの母が夫婦のためにと調合した媚薬を三人は誤って飲んだ。これによって二人は宿命的にのがれられない恋の情熱のとりこになった。媚薬の有効期限は3年間である。

王は妃と甥の間柄（密会を重ねていた）を知った。二人は処刑からのがれるためにモロアの森に身をかくした。3年間のつらい生活がつづいた。王は自ら彼らを殺そうとして忍び寄るが、二人の間に拔身の剣を横たえている寝姿を見て、わが心を恥じ、二人を許した。

トリスタンは外国に追放される身となったが、再び王の手に戻ったイゾルデのことが忘れられず、心の苦しみはつづけるばかりで、媚薬の有効期限もあてにならなかった。しかし彼は「金髪のイゾルデ」を忘れるために、ブルターニュはカレーの地で「白い手のイゾルデ」と結婚した。

このことで、王妃イゾルデはすでにトリスタンの愛情がさめてしまったものと思い込む。しかし、彼はイゾルデ恋しさのあまり、彼の妻「白い手のイゾルデ」の身に触れようとはしない。彼の心にあるのは「金髪のイゾルデ」だけだった。彼は日増しにやつれていった。

そうこうしているうちに、カレーでの戦いでトリスタンは敵の毒槍を身に受けて重体に陥った。その傷をいやしうるのはただ一人イゾルデのみ。彼は彼女を迎えに使者を送った。彼女はこれに応じた。

彼女の船には希望の合図に白帆がかけられてある。「白い手のイゾルデ」も王妃の到着を待ちわびていた。不幸にも、船は暴風に会って遅れた。ト

リスタンは弱り果てた。しかし、「白い手のイゾルデ」は夫と使者との間の密談を盗みぎきしていたために嫉妬にかられて、夫の枕もとにきて、船の帆は黒いと告げた。

「金髪のイゾルデ」がかけつけたときには、トリスタンは息絶えていた。彼女は苦悩のあまり、彼の遺骸に打ち重なって死に、彼の後を追った。彼らは寺院の左右に埋葬されたが、両方から生えた茨が左右にのびた。これを三度断ち切ったが止まらず、王はこの枝を切るのを禁じた⁽³⁾。

『トリスタンとイゾルデ』の物語に見られる中世風ロマンスには、中世特有の時代環境として父権制社会の伝統のきびしさの中で浮かび上る反伝統の形態をとる恋愛とはどういう性格なものなのかが読みとれる。例えば、マルク王が妃を迎えるのに一度も会ったことのないイゾルデを選んだり、イゾルデもまたこれに応じるというのは、当時の結婚観の現われであろうし、またトリスタンとイゾルデの密会が姦通ではないかと嫌疑がかけられ、そのうたがいが晴れると、イゾルデ自身の恋愛事件については不問にされるというのは、当時見られた貴族社会の風土的特性の表現であろう。

男女の愛は、それがどんな形のものであれ、ピューリタニズムとロマンティシズムの相関関係に依存する風土的特色の中で育つものである。愛は既成のものとして存在するのではなく、生み出されるものであり、そして生み出されたものは育てなければならないという性格をつよくもっている。その環境をつくり出しているのがピューリタニズムとロマンティシズムである。ピューリタニズムは伝統を、ロマンティシズムは反伝統をそれぞれが主張することから、その両者の葛藤の上に成り立つのが風土的特色である。同じ愛の形態であっても、それが一方の風土からは、不義の愛とか姦通として、断罪される対象になろうし、他の風土からは、それが不問にされるということはあることである。

イゾルデの母親が夫婦のためにと、媚薬のほれぐすりを娘にもたせてやるというのは、伝統のきびしさを少しでもやわらげられるものになればと

いう、母親の切なる娘おもいからであつたろうと思われる。宮廷といえども時代の枠組として規制されるつよいピューリタニズムの風土からはのがれられない。媚薬とは奇妙だが、恋の発生をうながす特效薬と考えればよい。自由恋愛の時代ならば、媚薬などなくても、媚薬の効果はひとりでに発揮される。恋愛には、これをはばむ障害がつきものであるが、それはピューリタニズムという伝統の枠組が横たわっているからである。しかし、その枠組がゆるみ、反伝統のロマンティズムが公然とまかり通るのであれば、恋愛の障害もそれほどきびしいものとはならずすむ。ただ、恋愛の障害が大きければ大きいほど、それだけ恋の情熱は高められ、媚薬的效果も大となる。

トリスタンとイゾルデがあやまって媚薬を飲んだというのは、恋の発生の偶然性や宿命性の問題ともかかわり、とくに情熱恋愛のばあいは、悲劇的な結末を予想させるものとなる。それに加えて、3年間を予想した媚薬の有効期限が当てにならなかったというのは、恋の情熱の持続性の問題である。トリスタンとイゾルデが死後においても、はげしく求め合ったというのは、恋愛の性格のミステリー性に加えて、とくに情熱恋愛のばあいに見られる情熱の神秘性の表明と受けとめられる。恋の情熱の持続性はまさに恋愛そのもののミステリー性であり、神秘性なのである。

情熱恋愛の神秘性が保持されるためには、トリスタンとイゾルデの愛の関係がそうであったように、愛の対象となるものは現実の肉体をもった存在ではなく、象徴化されたものにかぎられる。それは手をのばしてもとどかない星のような存在である。トリスタンはイゾルデを愛したのではなく、イゾルデへの愛を愛したのである。そうでなければ、情熱恋愛の神秘性は保持されないのである。

恋愛に伴う障害とは苦悩に満ちたものである。苦悩こそ恋愛のエネルギー源である。情熱恋愛の情熱はその苦悩を愛する情熱である。恋する二人は接近を求めながら接近を拒み、愛することによって拒否されることを願わざるをえなくなる。恋の苦悩が大きければ、それだけ恋慕の情が高めら

れるからである。けっきょく、恋に悩みつづけることを愛するのが情熱恋愛だということになる。

情熱恋愛と結婚とはむすびつかない。トリスタンが金髪の恋人イゾルデを忘れるために、白い手のイゾルデと結婚したのはおろかなことであった。結婚を前提にするという形態の恋愛もあるが、これは情熱恋愛とは区別される。中世風恋愛として位置づけられる情熱恋愛は、あくまでも結婚とはむすびつかない恋愛である。吟遊詩人のトルバドゥールは情熱恋愛の詩人でありつづけるかぎり、結婚の賛歌はおろか、自分の妻をたたえるうたをうたうこともなかった。トリスタンが情熱恋愛の主人公であればなおのこと、彼にはどのような結婚も考えられないはずである。

情熱恋愛の極致は死を貫く恋の情熱の賛歌である。しかもその情熱は決してつかの間の火花として終わることもない。死は人間にとって幸福の最大の障害、不幸であろう。その死というかべさえも越えて情熱を燃やしつづけるという、そのエネルギーはロマンティズムの情熱をおいてほかには考えられない。

至高の愛の形態は不変の愛であろうか。トリスタンが愛するその愛の対象は、イゾルデその人というよりはイゾルデへの不変の愛つまりイゾルデにトリスタンの分身を見るナルシズム的愛そのものであった。情熱恋愛の愛は愛の情熱そのものを愛する愛である。しかもナルシズム的愛だけがそれを可能にするのである。トリスタンとイゾルデは結婚で結ばれることはない。両者の接近をはばむ拔身の剣はナルシズム的情熱恋愛の象徴である。

死の障害に行きつきながらもなお、はげしい情熱を燃やしつづけるというのは、ナルシズムのゆがめられた自己愛としかいいようのないものである。したがって、愛の対象も地上的、現世的なものからは遠いところに求めざるをえない。情熱恋愛の主役はむろん男性であり、女性の肉体は地上的性格をもつもの、障害とみなされ、女性における肉的、官能的存在は拒否される。

中世風ロマンスとしての位置づけられる情熱恋愛の背景にあるものは、ナルシシズム的恋愛を生み出すにふさわしい風土であった。ロマンスは、ピューリタニズムとロマンティシズムのはざまにあって、ロマンティシズムの側に花咲くものである。貴族社会でしかも封建制という枠組の中では、ピューリタニズムの伝統が重くのしかかっている、ロマンティシズムの発現はきわめて制約されたものにならざるをえない。恋愛にはつきものの障害を乗り越えようとするエネルギーはロマンティシズムの領域のものであるが、中世的な風土においては、時代的な特色の影響を受けて、恋愛の情熱には欠かせないロマンティシズムのエネルギーは屈折した方向のもの、ここではナルシシズム的なものとして制約されるのである。これが情熱恋愛の原型として中世風ロマンスを生み出す背景なのである。

4 閉ざされたロマンス

人間の肉体的、官能的側面を抑えて、霊的、精神的側面だけに情熱の対象を限るのは、ピューリタニズムの禁欲主義の影響によるものである。これと同傾向のものは古代ギリシャの異教的情熱においても見られた。ギリシャでは、恋愛は同性間のもの、それも男性間だけのものであった。つまり、同性愛であった。

古代ギリシャでは、恋愛とは少年愛（パイデラスティア）のことであった。この形態は年長者（大人）と年少者（若者）の間に成り立つものであった。同年輩のものは友愛として区別された。ここでは恋愛を異性間のものとする考えはなかった。

このギリシャ的な恋愛の形態と中世の情熱恋愛とは基本的に相異なるものであるが、その根底に流れている情熱の形態は同類のものである。ギリシャにおいて、恋愛を男女間のものとは見なかったのは、父権制社会という歴史的現実の中で、女性が蔑視されていたからである。

中世風ロマンスでは、貴婦人は恋愛の相手である若い騎士に対して、い

わば教育係の役目を果たさなければならなかった。ギリシャにおいても、少年愛の年長者はそうした教育係をつとめ、また愛される少年も年長者に教育されることを誇りとし、その愛に報いるのに自己犠牲をもおしまなかった。そして両者は恥辱名誉を共にした。

少年愛においても情熱恋愛においても、本来的に肉体的な愛を排除する禁欲主義が前提ではなかった。肉体的、官能的愛の陶醉がタブー視されていたために、精神と肉体は二元論によって分断され、恋の情熱は肉体的愛に向かうことなく、その情熱の上昇・昇華を伴って精神的な愛だけが賛美の対象となったのである。このように肉体的愛を起点にして、精神的愛に向かう情熱はエロスの愛の形態である。

しかしながら、ギリシャ的二元論による禁欲主義には危険性が潜んでいて、極端な禁欲主義はいつでもその裏返しの放縦な快楽主義（ヘドニズム）に転ずるもろさをもっている。というより、もともと禁欲主義と快楽主義は一つのものの両極端または表裏の関係であり、両者はともに人間的な自己実現、自己追求の愛、自愛を原理として発現するものなのである。一方の禁欲主義は高級の価値のもの、他方の快楽主義は低級の価値のものとして区分されるが、両者は異質の愛を基盤としたものではないのである。

エロスの愛とは性格を異にするのがキリスト教のアガペーの愛である。アガペーはエロスがもつ情熱の二面性を一方だけに閉じ込めておこうとする愛の形態である。つまり、禁欲主義を神の愛として限定し、自己愛の否定を原理とする精神的な愛である。いいかえれば、禁欲主義か快楽主義かの選択を断つのがアガペーである。新約聖書にエロスのギリシャ語が登場しないのはそのためである。

プラトンのイデア説を徹底したのが新プラトン主義であるが、カトリックのカリタス（愛）の思想を定着させたアウグスティヌスは新プラトン主義の思想をキリスト教のアガペーにむすびつけて、禁欲主義が基調の神学的な愛の論理を展開した。これはピューリタニズムの徹底化といえるが、この論理がきわめてもろいものであったことは神学思想史を通じて見られ

るとおりである。中世末期の宗教改革期に、アガペーはエロスとはむすびつかない次元のものだとして、両者の分離とアガペーの純化が主張された。しかし、これは成功せずに今日に至っている。

恋愛における情熱が禁欲主義か快楽主義かという問題には、多分に倫理上、宗教上の目的意識が入ってくる。こうした目的意識は公的性格のものであるが、これを支えているのはピューリタニズムの伝統である。しかし、この公的性格性がうすれて、私的性格のものに転じたばあいには、禁欲主義はその支えを失って、快楽主義にいわば化けることが予想される。これがエロスの二面的性格のもろさであり、危険性である。

恋愛の情熱はエロスに属するものであって、アガペーのものではない。エロスとアガペーとは本質的に相容れないものである。この二つをアウグスティヌスは総合して一つのものにむすびつけたのであったが、これはニーグレンが指摘したとおり、矛盾に満ちた妥協でしかなかった⁽⁴⁾。いいかえれば、アガペーの側に立つピューリタニズムとエロスの側に立つロマンティシズムとは妥協でしか共存できないのである。

恋愛がロマンティシズムに属するかぎり、恋愛に対するピューリタニズムの圧力はさけられない。恋愛における禁欲主義はピューリタニズムに従順なときであり、その対極の快楽主義はピューリタニズムへの反発が動機である。情熱恋愛は前者にしたがうもので、禁欲主義が建て前である。

宮廷恋愛当時、そのエロスの情熱恋愛が断罪の対象にならなかったのは、それが禁欲主義に立つ公的性格の情熱の発露であるかぎり、ピューリタニズムの伝統と法に抵触する不義密通、姦通といった性格のものが少くとも表面的には生じてこなかったからである。しかし、宮廷風恋愛が公然たるものであったとはいえ、その内実は秘密裏に行なわれるものであって、エロス特有の二面性が一方向だけのものであったとする保証はない。また、これについての資料も乏しいのである。というのは、歴史は正史だけが生き残り、その裏面史は却下されるからである。

宮廷風恋愛の最盛期に、きびしい戒律の修道院が多く建てられたが、そ

れはまた生ぐさ修道士や淫乱の修道女を生み出す温床となった。この傾向は聖職者の領域ばかりでなく、庶民階級にも広がったとされる。だが、これとても、これが裏面史に属するものであるかぎり、これに対する実証性を求めても無駄である。

例えば、エラスムスが『愚神礼賛』を書いて、王侯貴族や司祭などを取り巻く風土関係を辛辣な筆致で戯画化し、風刺してみても、彼自身が正史の人物であるかぎり、彼から裏面史を推測できるほどのものは聞かれないのである⁽⁵⁾。正史とはピューリタニズムの伝統の視点からのものであって、ロマンティズムの反伝統のものは歴史という大河の中では、水面下にあって表面化することなく、押し流されていくというのがつねである。文学の扱いにおいても、文学として生き残れるものは正史に属するものであって、一見して反伝統の視点かと思われるものであっても、その基底においては伝統と矛盾するものは見られないのである。風刺文学というのも、反伝統への挑戦として価値づけられるものなのである。

中世風ロマンスはあくまでもピューリタニズムの伝統の中にあり、騎士物語であれトルバドゥールの詩であれ、現実のロマンスに快楽主義のものが混在していても、それが文学として表面化するときには、禁欲主義の側面だけが扱われるのである。中世の情熱恋愛は、いわば閉ざされたロマンスであり、周囲の状況によっては、禁欲主義にも快楽主義にもどちらにも傾く。つまり、禁欲主義のものが快楽主義のものへ、快楽主義のものが禁欲主義のものへといつでも移行できるものである。いいかえれば、両極端にあるものは一方から他方へと容易に化けられるのである。エロスの禁欲主義は、ピューリタニズムという公的性格のつよい伝統の枠組の中で発現するものであるが、その公的性格のものにゆるみが生じたばあいには、禁欲主義のエロスは官能的性格のエロティシズムへと化ける可能性がでてくるのである。

総じて、中世風ロマンスはその情熱の発露において、ピューリタニズムの伝統を大きく踏みはずすものとはならず、きわめて抑制のきいたもので

あったと考えられる。しかし、ロマンスはどのような形態のものであれ、エロスの情熱をもつかぎり、それを放置すればいつなんどきそれが無軌道なものとなって、伝統の枠組をゆるがすほどの危険因子ともなりかねない。これはどこかの時点で禁圧せざるをえなくなる。これを禁圧するには政治的圧力によるほかはないが、裏面史にかかわるものを直接相手にするのは政治のよくするところではない。ところが、中世風ロマンスが盛期に達するころには、これに呼応するかのようピュリタニズムの枠組を直接おびやかす異端運動が突出し、もはや放置できない状況にまで立ちいたった。

異端運動は政治的弾圧の格好の対象になる。この異端運動と離れがたくむすびついてたのが禁欲主義が主調の中世風ロマンスである。異端グループはカタリ派（清浄な人々）という共通の名称をもち、カトリシズムの伝統に挑戦する宗教的異端として、中欧、西欧を中心にその勢力をのばした。なかでも、南仏のアルビ派がもっとも勢力がつよく、その根絶を目ざしての凄惨な異端狩りをくり広げたのがアルビ十字軍であった⁽⁶⁾。

カタリ派はアガペーの愛とエロスの愛を同一視し、禁欲主義による高德を目ざし、現世での徳行が来世において報われることを求めた。恋人への思慕と処女マリアへの思慕とが重なり合っていて、結婚の拒否が最高の徳とされた。これは中世風ロマンスの禁欲主義と矛盾するものではなかった。しかし、こうしたことの結末はどうなるのであろうか。われわれはその結末を見る前に、異端は封じ込められ、それとともに中世風ロマンスも命脈を断たれた。おそらく異端に見られる宗教的情熱も禁欲主義的ロマンスも、それらが歴史の裏面に属するものであるかぎり、突出すればたたかれようが、またどこかの時点で再登場するものと思われる。

歴史の枠組としてのピュリタニズムの伝統はその裏面史に生じる反伝統の突出を許容しないが、反伝統の異端的なものには、いつのときにも魅力があろう。その魅力とは善悪の価値観によるものではなく、アナキズム的、ロマン主義的魅力であらう。中世風ロマンスの物語はエリザベス朝時代においてなお民衆に人気があり、手をやくほどであったとさえいわれた

が、次第にその影もうすれていき、セルバンテスはそれにとどめをさす目的で『ドン・キホーテ』を書いた。しかし、これによってロマンスの伝統が断たれたわけではなかった。断たれたのは、閉ざされた様式のロマンスというロマンスの歴史の一断面にしかすぎない。ロマンスは、ロマンティシズムの一様式であるかぎり、いつのときでも反伝統に根ざすものであり、またそうであるからこそ、ロマンスの伝統が歴史の進展の中で息づき、新しい様式や形態のものへと発展していく可能性をもつのである。

- (1) ロマンティシズムとして位置づけられる歴史的発現形態については、拙稿「英文学にみるロマン主義とその変容」(近藤正栄他著『ロマン主義の諸相』神奈川大学人文学研究叢書(8) 神奈川新聞社, 1991年) 参照。
- (2) 宗教改革期に二派に分かれた反伝統の運動の中でミュンツァー型のものが挫折する理由については、近藤正栄著『解放神学思想と背景』現代キリスト教神学叢書(6) (星雲社, 1990年), 51-55ページ参照。
- (3) 『トリスタンとイゾルデ』は12世紀に二つのフランス語の韻文のものがあるが、13世紀にはフランスでもトリスタン伝説として散文ロマンスに書き直され、イギリスに入ってきたのは15世紀である。日本ではフランスのトリスタン伝説研究家ベディエによるもので、佐藤輝夫訳『トリスタン・イゾー物語』(岩波文庫, 1953年)がある。トリスタン神話を解説したものでは、ルージュモン著、鈴木・川村訳『愛について』(岩波書店, 1959年)が参考になる。
- (4) スウェーデンの神学者ニーグレン著、岸・大内訳『アガペーとエロース、基督教の愛の観念の研究』(新教出版社, 1954-63年) 参照。
- (5) エラスムスは平和主義者であり、節度と中庸の精神を強調したために、伝統の側からも反伝統の側からも非難されることになったが、ルネサンス期の人文主義者は総じてピューリタニズムとロマンティシズムのはざままで苦悩をしいられることになった。エラスムスはその典型と考えられる。
- (6) アルビ十字軍による徹底した異端狩りは宗教上の反伝統の弾圧ばかりでなく、中世風ロマンスをも反伝統のものとして巻き添えにすることになった。しかし、反伝統のエネルギーは抑圧しきれるものではなく、のちの時代にはこれがロマン主義の再浮上として陰に陽にロマンスの世界にも影響をおよぼすのである。